



とって印象的なのは『富岳三十六景』で、多くの絵からなっていて、地方から富士山を眺める時の景色が描かれています。富士山の景色が描かれているだけでなく、その時代の日本生活にも反応しています。

8月4日の夜、私たちはコンサートで花火を楽しんでいたことを思い出して、本当に楽しかったです。

3日間の時間が短いのに、日本の家庭の生活を理解でき、日本の家族の温かさを感じ、まゆ姉さんと友達になりました。今回の体験イベントは私の大切な思い出となります。また、また山梨県に遊びに行きます。

楽しい3日間

鄒 晓怡



楽しい気持ちを抱いて、2泊3日のホームステイに参加しました。8月3日みんな一緒にJRで甲府へ行って、駅で迎えました。小林さんと会いました。後はごはんを食べて、山梨県の有名な食べ物=鳥もつ煮を食べました。車で一時間くらいで家に着きました。

オオ～これは六人、大きい家族でした！おばあさん、小林夫婦、3人の子供。日本の書道を体験しました。自分の名前を書きました。複雑で、難しいと感じました。

おばさんは晩ご飯を自分で作ってくれました。とても美味しかったです。夜は湊ちゃん、黎子ちゃん、紗和ちゃんと一緒にカードゲームババ抜きをしました。みんなで大笑いしました。

第2日、富士山の周りの所へ行きました。自然の景色を見て、美しいと思いました。今でも懐かしく思い出すのは、夜に大月のお祭りに参加したことです。日本のお祭りを初めて見たので、面白かったです。小林さんの家できれいな浴衣を着せてもらって、お祭りへ行きました。皆は踊って、スローガンを歌った。雰囲気がとても良かったです。日本の文化を感じました。

第3日、自分で作り体験する店でネックレスを作りました。後は美術館へ見学に行きました。

今回の活動は日本語を話せる能力が上がりました。日本の生活を体験しました。小林一家の皆さんにとてもありがたい気持ちを持っています。家の温もりを感じました。



第4回教育交流シンポジウム（教育交流・研究等助成事業）

今年度も「第4回日中教育交流シンポジウム」と言う形で、日中の学生を中心とする教育文化交流を計画し実施しました。パネラーには、今年度の日本語作文コンクール最優秀賞の復旦大学の学生・黄安琪さんと、過去の入賞者で日本に留学している3名と、中国への留学経験のある日本人3名を選びました。また今年度は、日中関係に関する意識調査の結果を基に、日中双方のパネラー、また会場にいる日中の若者を中心とする参加者のみなさんの意見を練り合わせ、課題に迫るという工夫をしました。日本語作文コンクールへの取り組みとも関連させる中で、日本と中国の若者の意識に焦点を当てて、両国の歴史性を踏まえた関係認識を考えていく。そんなシンポジウムとして実施できたと思います。日中を中心とする教育文化交流活動を活発化させるため、一つの意味ある取り組みとして「第4回日中教育交流シンポジウム」も大きな成果を上げることが出来たと考えています。

(1) 第4回日中教育文化交流シンポジウム実施計画

- 1 実施目的
 - 日本と中国の文化・教育等について語り、交流し、相互理解を深める。
 - 日中両国の文化・教育に対する理解の深まりを、日中両国の友好の礎を担う人材の育成に生かす。
 - 2 実施日時 2019（平成31）年3月2日（土）14:00～17:00
 - 3 実施場所 日本教育会館9階第5会議室（千代田区ツ橋2-6-2）
 - 4 参加者
 - ・日本と中国の青年（中国からの留学生<22人>、日本の学生<15人>、日本の教職員<35人>）
 - ・協会顧問・理事・評議員・賛助会員・関係者・一般15人
 - ・全参加者数80名
 - 5 講師・コーディネーター・パネラー
 - ・コーディネーター＝日本橋報社・日中交流研究所代表 段 跳中氏
 - ・パネラー＝日本語作文コンクール入賞者
 - ①黄 安琪 復旦大学4年生（第14回最優秀賞）
 - ②朱 杭珈 一橋大学大学院1年生（第12回受賞者）
 - ③雷 雲惠 文教大学大学院1年生（第11回受賞者）
 - ④張 君惠 長沙中日文化交流会館副館長（第12・13回受賞者）
 - =中国留学・滞在経験のある日本人青年
 - ①森本康太郎 慶應大学法學部2年生、台湾の大学に留学予定
 - ②大友実香 元会社員・第1回「忘れられない中国滞在エピソード」コンクール受賞者
 - ③堀地 綾 会社員、中央大学在学中上海と台湾遊学
 - ・講評＝財団公益審査委員・姫路獨協大学名誉教授 初岡昌一郎先生
 - 6 選定
 - ・留学生については、日中交流研究所やフジ国際語学院等を通じて公募する。
 - ・日本人学生については、日中交流研究所や関係団体を通じて公募する。
 - 7 内容 講演とパネルディスカッション
 - 8 日程 シンポジウム
 - 13:30 開場・受付
 - 14:00 開会（黒田理事長挨拶・興石顧問挨拶）
 - 14:30 交流シンポジウムの方向付け（コーディネーター）
意見交流（パネラー）
総括（コーディネーター）
 - 16:50 講評（初岡先生）
 - 17:00 閉会
- ※協会顧問・関係役員・理事・評議員・監査員・コーディネーター・パネラーによる交流会（懇親会）を教育会館内の中華料理店で開催いたしました。

(2) シンポジウム内容報告

第4回ということで、「今回は、テーマに迫る資料を提示する中で、参加者から様々な意見を出してもらい、成果につなげていこう」という考え方で設定しました。協会の黒田文男代表理事、奥石東顧問からも開会の挨拶の中で、日中の教育文化交流の歴史や意義それから課題について話していただきました。

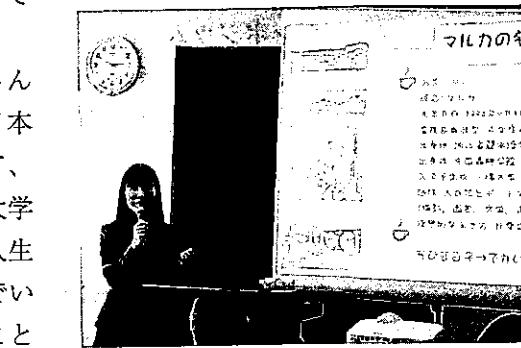
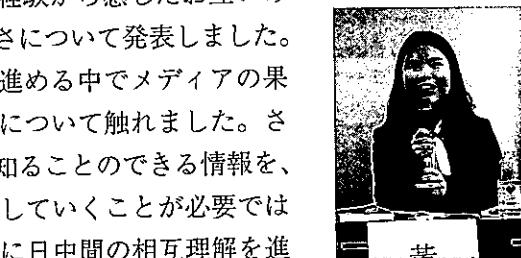
パネルディスカッションの始めに、コーディネーターの中日文化交流研究所所長の段躍中さんから、日本の言論NPOと中国国際出版集団による世論調査「第14回日中共同世論調査」の結果について、説明していただきました。「日本世論：中国に良くない印象を持っている86.3%、中国世論：日本に対して良くない印象を持っている56.1%、日本世論：中国に対して良い印象を持っている13.1%、中国世論：日本に対して良い印象を持っている42.2%」という調査結果をどう捉えるか？日中両国民の印象の差は何か？お互いに良い印象を持てる関係になるためにはどうしていったら良いのか？今日のシンポジウムの中で意見交換をしていくことが参加者に確認されて、パネルディスカッションがスタートしました。



まず、第14回日本語作文コンクールで最優秀賞・日本大使賞を受賞して、日本に招かれている復旦大学4年生の黃安琪さんが発言しました。黄さんは、「国と国との関係の中で、人と人の交流がいかに大切か」ということについて話されました。京都の大学に留学した時の特に和服を通しての異文化体験と、その文化交流の経験から感じたお互いの交流と理解の大切さ素晴らしさについて発表しました。さらに、お互いの文化交流を進める中でメディアの果たす役割がとても大きいことについて触れました。さらには、お互いの国のことを探ることのできる情報を、個人の段階でも画像等で拡散していくことが必要ではないかと指摘されました。日中平和友好条約締結40周年を迎えてさらに日中間の相互理解を進めたいとの決意が話されました。

続いて、第12・13回日本語作文受賞者で、現在長沙中日文化交流会館副館長の張君恵さんが発言しました。張さんはまず「日本語ラジオ放送」について、現在12万人ものリスナーがあること、日本語文化に興味を持っている人がどんどん増えていることについて話されました。また、日本語ラジオへの反応は中国人だけではなく、日本人のリスナーからのコメントも多いことをあげ、ネット活動は壁を越えていくと話されました。そして、さらにこれから文化の交流は、「フェイス・ツー・フェイス」となって行くと考え、「長沙中日文化交流会館」の「日本語会話サロン」の取り組みを行っていることについて発表されました。参加年齢層は、10・20代、30・40・50代、60・70代と三分の一程度で、中国の60・70代には日本に対して悪いイメージを持っている人が多いがそういう人ばかりではないと話されました。

第12回日本語作文受賞者で現在一橋大学大学院1年生の朱杭珈さんが発言しました。自作のプレゼンテーションを用意して、自分と日本語の出会い、日本との出会い、そして今何を考えているかについて、みんなに分かり易く伝えてくれました。朱さんは医者を目指して大学を受験したが、日本語学科に回されてしまい、そのことが自分の人生を大きく変えてしまったことを話してくれました。日本語を学んでいく過程で「日本語作文コンクール」と出会い、それに取り組むことで、日本語の実力をつける、コンクール入賞・奨学金獲得とまた大きく人生が変わったことも話してくれました。今、大学院でAIを学びながら、一人から場作りを進める企業経営を



目指してSNS等で発信していきたいと考えていること、また、日本語を通して私たちに力を与えてくれた「日本語作文コンクール」のエネルギーをみんなに届けたいと思っていると話してくれました。

第11回日本語作文受賞者で、現在文教大学大学院1年生の雷雲惠さんは、次のような話をしてくれました。日本との縁は、中国の東北大学の日本語学科で学んだことから始まったそうです。日本の文化・行動様式・その他総てに興味が持てたと話してくれました。異文化理解ということの魅力とまた大切さを学んだそうです。日本語作文コンクールで1等賞となり、「日本語の教師になりたい」という思いが強くなり、そして、「日本へ留学したい」と文教大学大学院へ進学したそうです。現在修士課程が修了予定で、今後は博士課程へ、そして中国へ帰り、大学で日本語や日本の文化について教えていきたいそうです。そして、日中交流の架け橋になりたいと語ってくれました。多文化共生の考えをしっかりと持つには、外国を訪れる事、そこで暮らし、人々と接することがまず大切だと意見発表してくれました。

第1回「忘れられない中国滞在エピソード」コンクールの受賞者で、翻訳者の大友実香さんは、夫が上海の会社へ赴任したので「駐在員の妻」として2年半中国で暮らした経験から日中の交流について話してくれました。学生時代に中国語は少しだけ習ったが、特別な思いやまた立場で中国に行ったわけではないが、そのことでむしろごく当たり前に、身近な所で中国と触れ合い交流することができたと話してくれました。中国での経験を通して「学ぶということは、新しいことを知ることだと思う。それは、相手を知ることを通して自分を知ることもある。相手の立場に立って考えたり知ることの大切さが分かった」と語っていました。それから、海外の人々との触れ合いについては、「日本にいても中国や外国の方々とふれあえる機会がある。ウーチャットの着信音を電車の中で聞いたとき、自分はそのことに対してどういう行動をとるのか？そんなこと一つでも大切な触れ合いの機会となる」と話してくれました。

中央大学在学中に上海と台湾に遊学し、現在会社員の堀地綾さんが、次のように発言してくれました。大学で第二外国語として中国語を学んだ時に、「あなたの名前を中国語で発音するととてもきれいな音になります」と先生が話され、実際に中国語の音で名前を呼んでくれるとても感動したことが、中国語の学習と中国への留学へと進むきっかけとなったことを話されました。日本の企業が中国でビジネスをすることの難しさは、言語の壁だと感じたことも話してくれました。留学中に交流会の中で、中国語を話す、歌を歌うということを通して少しづつ中国語の習得が進んだ経験も話してくれました。「その国に行ったら、その国の言葉を話す」そのことの大切さが分かったと発表してくれました。漢方薬のことを知るというときにも、中国語が少しできることができることが多いに役立つと話してくれました。自分は、名前の音のことから「中華文化圏」に興味を持ったけど、どんなことでもきっかけをつくってくれたら、異文化への興味につながるのではないかとまとめてくれました。

今年、台湾の大学へ留学予定の、慶應大学法学部2年生森本康太郎さんが、続けて発表してくれました。まず、将来のビジネスを考えて、大学の第二外国語には中国語を選んだことを話してくれました。そこで、とても信頼できる熱いパッションを持った中国人の先生に出会い、また、社会人（中国人）とも知り合い、素晴らしい人々（中国人）に出会えたことから、留学を決意したと話してくれました。第二外国語の意義については費用対効果という意味では、日本の大学において生き残れていないのではないかという意見で、そのことも留学を考えた要因の一つだと語ってくれました。今後の中国語学習の中で、今日の朱さんのプレゼンテーションの中にあった、「日本人が“オ”と思うような日本語」を、自分は中国語で使えるように習得に頑張っていきたいと決意を述べてくれました。

その後の話し合いの中での発言については以下のようでした。

静岡の教職員から、「日常中国の方と接する機会が少ない。そうした中で日本人は中国人が日本をよく思っていないと思い込んでいるのではないか。今日は理解し合える良いチャンスになっている」という意見がありました。そして、3年ほど中国に滞在した叔父さんから、中国で出会った優しい人々のことや最近日本に好意的な人が増えていると感じたこと等を聞いたと話されました。

張さんから、中国で体験した日本語教育について、授業以外に会話の練習をする機会を作ってくれた（スピー



チコンテストやその他のイベント)という発言がありました。

黄さんからは、日本から来た先生がとても熱心だったこと、また、中国の学生は日本のアニメ・ドラマを見て日本語を覚えることが多いと話してくれました。そして、日本の文化や社会について多く学ぶことが大切で、同志社大学に留学したときも、教科書だけでなく新聞記事を使って、その時の社会問題を教材としたという話がありました。

雷さんから、外国語教育の良さは、一つの言語を学ぶことで世界を知ることができることだという発言がありました。日本語教育を通して、戦争の記憶での先入観を払拭することができる、自分の国の良さを知らせることができると思うという話もありました。

朱さんから、日本に来て、日本での日本語教育の組み立てやチームワークの良さを感じたことと、学生の個性を伸ばそうとする教育のあり方に感動したことを語ってくれました。

鹿児島大学の先生から、日中また日中米の現状課題の比較(例えば高齢者介護等でも)を行えば、また見えてくるものがあるのではないかという発言がありました。

堀地さんから、日中の文化比較について、プレゼントなどを渡す場合、日本では相手が持つて帰れる程度のものを考えるが、中国では兎に角どんと大きなものを用意するとか、中国では“割り勘”をしないが、それは次には私が払うのでまた会いましょうの意味があるという発言がありました。

大友さんからも、文化比較の一つとして、中国での小さい子どもに対する態度(車中で小さい子に席を譲る、ベビーカーの人をみんなで保護する等)について驚かされたという発言がありました。

フジ国際語学院の留学生から、相手のことをよく知らないから誤解が生まれる、中国において反日映画やテレビを見ていると日本は悪い印象になる、しかし、日本へ来て実際にいろんな体験をすると、すごいカルチャーショックを受けたという発言がありました。それは、例えば、歩行者と車の関係は、中国では車が優先で人は後なのに日本ではまず歩行者が優先で、日本人の温かさに感動したと話してくれました。

黄さんは、日本のバリアフリーの取り組みの素晴らしさについてまず発言がありました。さらに、留学した時に、コンビニエンスストアの人、「何かあったら声を掛けてくださいね」といってくれた時に、日本人の温かさを感じたという話をしてくれました。

中国の長沙中日文化交流会館の劉さんから、日本に来てその文化や様の素晴らしさに感動したという話をしてくれました。駅で電車を待つ列の中に赤ちゃんを抱いた若い母親がいて、その母親が赤ちゃんに、「待っててね。順番だからね」と話しかけていたのを見たとき、日本文化はすごいと思ったと教えてくれました。

段さんからも自分の体験が話されました。はじめて日本に来て、日本のイメージを一新された体験は、駅で鞄を置き忘れどうしようもなく途方に暮れていたら、人々の助けで鞄がちゃんと出てきて自分の元に返された時には、「日本はなんて素晴らしい国だ」と心から思ったという話でした。

他のフジ国際語学院の留学生から、日中の間にある悪いイメージは、お互いの理解が深まっていないからだという指摘がありました。日本へ来ることや日本のACG(アニメ・コミック・ゲーム)によって、中国の若者が日本に持つイメージは変わる、以前の戦争などの悪い印象を変えていくかという発言がありました。さらに、中国の経済や文化をもっと日本に知らせていけたらお互いの悪いイメージが変えられると思うと話していました。

堀地さんから、自分の中国へのイメージはどこで作られたかというと、中国語がすごく強く感じられたことで、そのまま中国が強い国というイメージになった。しかし、前述したように「あなたの名前は中国語でとてもきれいな音になります」という先生の一言で変わったと語ってくれました。

大友さんは、中国のことを日本人へどんどん発信すること、広い深いいろんな中国を見せ、中国へ誘えるような体系を創造していくことが大切ではないかと発言してくれました。

張さんは、「中国をもっと知ってもらいたいです。そのためにも、是非とも長沙に来てください」という、具体的な発言がありました。

森本さんは、実際に体験しないとなかなか異文化のことは分からぬという中で、教育はともすると悪い歴史的な背景ばかりを取り上げてしまうし、マスメディアも今日の日中



間の悪い話題が多く取り上げられているといえるのではないか、だから、お互いを招いてその相互理解の中で日中関係を進めていくしかないと思うという発言がありました。

段さんが、グラフを示しながら、中国はめざましい経済発展の中で、現在世界第2位の経済大国と成っているが、果たして諸外国から信頼されているだろうか?という、課題が投げかけられました。

山梨の教職員から、多くの価値観に触れることでその国に親近感を持てるようになるのではないか、その国を知るとはその国情報をより多く多面的に知ることが大切だという発言がありました。そうした視点で考えれば自分の身近な所に中国とのつながりがあるのでは、さらに、スカイプ等を通して(今学校では英語圏の国との交流だが)積極的に中国と交流できないかという発言がありました。

朱さんから、「まず交流しないと親近感は生まれない。中国語を勉強したい人は増えているので、そうした交流の中で、“中国は怖い”と言うイメージを変えていきたい」との発言がありました。

雷さんは、日本人に親近感を増させるためには、一人一人の中国人が責任を持たなければ駄目で、海外へ行く中国の個人個人が、自分が中国人であるという意味で行動に責任を持たなければいけないと話してくれました。

大友さんは、交流について、「いきなり高いハードルにせず、身近なものたとえば食べ物などで体験的な交流をしてみると、知れば知るほどスケールの大きい中国が理解できるのではないか」という発言がありました。

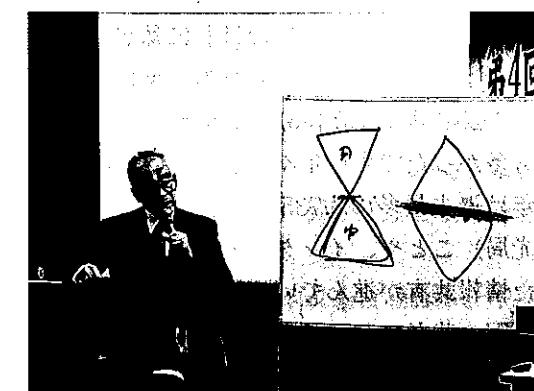
黄さんからは、「相手の国に行って、そしてお互いに尊重して、目で見て、耳で聞いて、肌で心で感じて、相互交流ができるといい。国や文化は違っても縁を大事にしていきたい」という発言がありました。

講評は、姫路獨協大学名誉教授で公益財団法人日本中国国際教育交流協会公益審査委員の初岡昌一郎先生が行ってくれました。

まず、この日中教育文化交流シンポジウムは、規模としては小さなものであるけれども、非常に大きな重要な役割を担ってくれていて、十分な成果を上げているという指摘がありました。まず特徴的なことは、日本やアジアの未来を示唆しているシンポジウムだといえると話され、その理由は、女性の方々の発言がほとんどだということを挙げられました。これは良い意味のカルチャーショックだと話され、女性が進出している現場としては、日本では教育の場が挙げられるが、一方で世襲制が蔓延している国会は一番駄目だと話されました。本シンポジウムは、まずその意味で一番進んでいると重ねて指摘されました。

文化については、日中の相違から学ぶことでプラスに作用できるし、それは、比較によって触発され進歩していくものだと言われ、そして、文化の根は語学であり、人種ではなく、言葉から文化は育まれていくと話されました。ゆえに日本語だけの視野では真に狭く、文化を生み育てて行くにはとても不十分だと指摘されました。今、中国について、ともすると、その成長ぶり、存在感、影響力を危惧するようならえ方があるが、中国は、回復途上国といえるのではと話されました。それは、ここ2500年くらいの中で、中国が世界のトップとして影響力を持っていた時期は2100年くらいあり、西欧は400から500年くらいの間だけで、しかもそれは武力による支配でしかなかったと話されました。今後、中国がトップという世界がきても、何ら不思議ではないと考えていると話されました。

講評のまとめとして、「歴史を記す歴史家は、必ずその時代の価値観に影響されている。つまり、『歴史』は事実にどういう光を当てるかによって変わるものである。あらゆる理論は、分析ではなく、目的・意欲・価値観から生まれている(歴史は特にそうであるが)。国家、民族に最大の価値を置いて歴史論を作ると、対立の歴史が生まれる。しかし、今日皆さんが発表されたような、家庭、個人、社会の繋がりに価値を置くと、対立は生まれない」と話されました。そして、今回の「第4回日中教育文化交流シンポジウム」について、「従来の国際関係論では、『国際関係』とは国のトップ(政治家、外交官)の交流であり、従来の関係において、『国や領土を守ること』が安全保障であった。しかし、今日の『国際関係』は、一般の人(大学、会社、諸団体、個人)の交流になりつつある。今、この交流が一番発展しており、ここには相違、摩擦はあっても、大きな対立は無い。この新しい関係においては、『人々の生活を守ること』が安全保障の基本となる。そういう意味で、今日の皆さんの発表は、まさに新しい国際関係の方向性を示していると思う。このシンポジウムは、小さな会合かもしれないけど、こういう意味で未来を示す会合であった。」と、評価していただきました。



第14回日本語作文コンクール（教育交流 研究等助成事業）

2018年度第14回日本語作文コンクール（日本橋報社主催、外務省・在中国日本大使館後援、朝日新聞社など協賛）には、中国全土の省市区の235校から4288編の応募がありました。

日中関係は昨年、国交正常化45周年、そして今年は平和友好条約締結40周年という記念すべき年を迎える。この間、日中関係は改善への動きをさらに加速させています。そうした前向きな両国関係を背景として、中国で日本語を学ぶ中国の若者たちの日本語学習熱や日本への関心が高まりを見せていることの現れだと思われます。応募総数4288本のうち、男女別では男性787本、女性3501本と、女性が男性の約4.4倍を数え、圧倒的に多かったです。今回のテーマは

- (1) 中国の若者が見つけた日本の新しい魅力
- (2) 日本の「中国語の日」に私ができること
- (3) 心に残る、先生のあの言葉の3つでした。

(1)2045本(2)540本(3)1703本と、テーマ(1)への応募が最も多かったです。年々増加を続ける訪日中国人客が2017年は過去最多の約735万6千人を記録した（日本政府観光局）ことや、インターネットの発達により国境を超えた情報共有が進んでいるなど、「日本の新しい魅力」が中国の若者にとっても、より身近に感じられるものになったためと考えられます。

協会は積極的にこの事業を後援し、毎年最終審査員に加わり、日本中国国際教育交流協会賞（教育賞）2編を選出しています。本年度の教育賞は、劉玲さんの「流行語からの発信」と、邵華静さんの「日本の「中国語の日」に私ができること」でした。

★教育賞・日中国際教育交流協会賞（5万円相当）

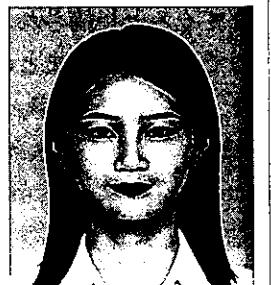
華東師範大学 刘 玲
青島大学 邵 華静

（1）教育賞受賞作品

日本の「中国語の日」に私ができること

流行語からの発信

華東師範大学 刘 玲



これは三年近く日本語を勉強しているが、まだ一度も日本に行ったことがない私の体験である。先学期、交換留学で一年間中国語を勉強している日本人のAさんと友達になった。彼女はよく中国語の勉強のために、中国の番組やドラマや歌などについて聞いてくる。私は彼女から中国語に対する情熱を感じた。今学期になってAさんの中国語がだいぶうまくなつたので聞いてみると、冬休みにも中国の番組を見ていたそうだ。中国にいる間に、彼女の中国語は日常会話だけではなく中国の流行について話せるまでに上達した。その時、中国人として私は非常に感心した。



しかし、Aさんのような学生はどちらかというと少数だ。以前、短期プログラムで中国に来た日本の大学生と交流したことがあった。彼らは日本の大学で中国語を勉強していた。恥ずかしいのか、まだ中国語に馴染んでいないのか、私たちと話す時にほとんど日本語だった。そして、なぜ中国語を勉強したいのかと聞くと、「漢字に興味がある」「文化も近いし、一応外国語だから中国語を選んだ」という答えが多かった。それは私から見れば、どうも中国または中国語に情熱があるとは思えなかった。初めて中国に来たのだから仕方がないのかもしれないが、彼らは中国のことも知らないあまり興味もない様子だった。

でも、後でよく考えてみて気づいた。確かに今の中国には日本のサブカルチャー文化のような日本の学生を引き付ける何かが足りない。日本人が学校で学んでいるのは昔の中国である。それはもう過去であり今の生きている中国ではない。中国に興味をもてない理由は、そこにあるのかもしれない。では、どうしたら日本で中国語を学習している日本人に、今生きている中国を身近に感じてもらえるようになるのだろうか。そんなことを考えていると、私は中国の流行語について作文を書いたときのことが頭に浮かんだ。日本人の先生が、私たちの作文を読んで、改めて今の中国を肌で感じる事ができたと喜んでいたのだ。もし中国の流行語を日本人に紹介したら、きっと今の中国を伝えられるのではないか。

中国では、日本と同じように流行語大賞が毎年選ばれる。選ばれた流行語はネットで検索すれば出てくるが、その解説や裏にあるエピソードまでは、なかなか日本人には届かない。さらに、同じ漢字で違う意味の場合、誤解を招くこともある。日本人に分かるように中国の流行語を訳して日本人に紹介することは、私のできることではないか。まず、色々な資料を調べ、中国語の専門家に流行語の意味を確認する。そして、その裏にあるエピソードを整理する。日本人の先生の指導の下で、できる限り中国の新しい文化を詳しく紹介して日本語に訳す。文章だけでは伝わらないので楽しいイラストもつける。最後に、それらを絵葉書のセットのようにしてプレゼントとして日本人に送ってもいい。もし短期プログラムの学生に会ったら、彼らにも送りたいと思う。もっと詳しい情報は、ウェブサイトで紹介して広める。自分で検索すれば日本語も中国語も出てくるようなサイトがあれば、生き生きとしている中国が伝わる。そのようなサイトを作つてみたい。「中国語の日」に、私は友達とこの活動に取り組みたいと思う。

ある国の言葉を勉強しようとするとき、まずその国の文化を理解しなければならないとはよく言われる。中国で勉強しているAさんは、生きている中国を身近に感じられるからこそ勉強にも熱が入った。日本で中国語を勉強している学生も、中国の流行語を知ることで、生きた中国に興味をもってくれるのではないか。

言語を勉強しているからには、小さなことでもいいから両国の理解を深めたい。今の中国にとって、足りないのはソフトパワーだ。いつの日か、より多くの日本人に「今中国の〇〇にはまっている」と言ってもらいたいと思う。

日本の「中国語の日」に私ができること

日本の「中国語の日」に私ができること

青島大学 邵 華静

「これはどういう意味？日本人はひどすぎ！！！」

一年前のある朝、ウイーチャットから友人Aさんの怒鳴り声が聞こえてきた。相当怒っているらしい。

目覚めたばかりで、まだ寝ぼけている私はびっくりして、さっそく一緒に届いた写真を見た。

「青い空を目指し、中国必死」

日本の新聞記事のタイトルが目に飛び込んだ。「中国必死」の四文字には赤い丸印までついていて、非常に目立った。

短気な彼が何を誤解したのかがすぐ分かり、苦笑するしかなかった。

「怒らないで、平気平気、深呼吸して……日本語の必死って一生懸命頑張ることなのよ。自分勝手に解釈しないでよ」



私の説明を見て、彼は驚いたようだった。「へえ、そんな意味だったのか……」納得したのか、恥ずかしそうな顔の絵文字が届いた。

彼によると、この日本の新聞記事のタイトルはネットで大騒ぎを起こしたそうだ。私がその記事を見た時には、もう日本語が分かる人からの説明が書いてあって、幸いなことに誤解は解けていた。

このことは深く印象に残って、今でもはっきり覚えている。「必死」のような中日同形語に理解が足りないからこんなことが起こるのだと痛感した。

中日同形語には中国と日本で意味のまったく異なるものも多い。日本語の勉強を始めたばかりのころ、中国語で「無理をする」という意味の言葉「勉強」は日本語では「学習すること」だと知って、みんなが「やはり日本人は賢くて正直だなあ、勉強って確かに無理だよ」と冗談を言った。翻訳の授業で、「彼は地道に研究している」という日本語を、自信満々で「他在研究地道」（彼は地道を研究している）と中国語に訳した人がいて、みんなが爆笑した。

中日同形語を誤解しても笑い話になるだけで、別に大したことじゃないと思っていたが、両国民の友好関係を損ないかねなかった一年前の騒ぎで、私は中日同形語について真剣に考えるようになった。

中日両国でともに使われている漢字は相手の国の言葉での読み方は分からぬが、ある程度意味が理解でき、いわば両国民の相互理解に役立つ架け橋であると言える。しかし、意味がまったく同じであるとはかぎらず、「必死」「勉強」「地道」のように意味がまったく異なる中日同形語もある。誤解しても笑い話になるだけならばいいが、中日両国で使われている漢字が両国民相互の誤解を招く落とし穴になってしまってはいけない。

祖先からいただいた漢字という宝物を両国民の間の架け橋にするために、私にはやりたいことがある。それは常用中日同形語の意味分別リストを作ることだ。中日同形語の意味の違いをしっかり研究して、中日両国の人々に分かりやすく示せばきっと役に立つだろう。思い立つ日が吉日、実は一年前、友人Aさんの「必死」問題が起ったその日にリストの作成に取り掛かったのだ。

今までに一年が経った。始めたばかりのころ、多分つまらなくて面倒くさいと思う日が来るだろう、そしてもうやめようとする自分を「頑張って！」とこっそり励ます場面まで想像していたが、実際にやってみると面白くて、達成感があって、やればやるほど言葉には魔力があるなあと感じている。今はもう日常よく使われる言葉を1000語ぐらい収集し、両国語における意味の異同を詳しく分析した。日本の「中国語の日」までにはもっとたくさんできると思うが、その日にネットにアップして、皆とシェアしたい。影響は大きくななくても、まずは日本の皆さんのが中国語って面白いなあ、ちょっと勉強してみようかなと思ってくれればと願っている。中途半端にやると他人のマネになる。とことんまでやれば他人にはマネできないものになる。将来、それがきっと大きな力になれると信じて、やり続けようと思う。毎年「中国語の日」にネットにアップして、多分、五年目のその日、アップするのは常用中日同形語の辞典だ。

指導教師：張科薈、小川郁夫

資料 (1) 会報「共生力」 28号、29号

公益財団法人日本中国国際教育交流協会

会報 NO.28

2018.4.5

共生力

HP: <http://ajciee.or.jp/>

Tel: 055-269-6533 Fax: 055-269-6534

〒400-0031 山梨県甲府市丸の内2-32-16

甲府丸の内マンション302

発行人：黒田文男

第3回日中教育文化 交流シンポジウム開催

第3回日中教育文化交流シンポジウムを、3月3日(土) 日本教育会館において、約90名(中国からの留学生約30名、教職員約35名、協会関係者・一般・マスコミ関係者約20名)の参加で実施しました。

基調講演については、中国への留学経験者で、日中友好議員連盟幹事長の近藤昭一衆議院議員に、「日中関係と若者の役割」という話ををしていただきました。日中平和友好条約締結40周年に当たる今年、改めて両国の歴史・現状・今後について考えることは、大変意味がありました。近藤先生の貴重な体験を踏まえたお話と、日中の若者のどういった活動に期待するかというお話の一つ一つが、今後の取り組みの示唆に富み、大いに学習を深めることができました。

パネルディスカッションは、日本僑報社・日中交流研究所代表の段躍中氏にコーディネーターをお願いし、「日中交流についての若者の役割」「語学の壁をどう乗り越えるか」等について、意見発表や話し合いを行いました。パネラーは、宋妍(第13回中国人の日本語作文コンクール最優秀賞者・学生)郭可純(第12回中国人の

日本語作文コンクール等賞受賞者・日本で就職)徐博晨(東京大学大学院留学生)市川真也(早稲田大学四年生・北京大學へ留学)宮川咲(公益財団法人国際文化フォーラム職員・上海大学へ留学)鈴木由希(中華圏エンタメライター・台湾国立大学へ留学)という6名の方々でした。

日中友好議員連盟近藤昭一先生の講演
大学へ留学)宮川咲(公益財団法人国際文化フォーラム職員・上海大学へ留学)鈴木由希(中華圏エンタメライター・台湾国立大学へ留学)という6名の方々でした。

宋さんは、「はじめ日本語の勉強をすることは恥ずかしかったけど、今は良かったと思っている。」「日本の沢山の人が、日本語の学習者に多くのチャンスを与えてくれていること、日中の交流に努力されている日本人の方々に感謝している。」また、「日本のバラエティー番組が好きで、そこから日本語を身につけた。」という発言がありました。郭さんは、神戸大学に留学したときにお世話になった日本人との縁について話してくれました。「小さなことの積み重ねで、きっと大きなことが出来ると信じている。」「私の力は小さいけれど、自分なりの努力で、『日中友好の花』がもっと綺麗に咲けるように、頑張っていきたい。」と、語学については、「日本人の日本語の先生から、『外国語の勉強は、日々の努力の積み重ねだ。』と教わりました。」と話しました。徐さんからは、「日中友好といながら、私自身もつらい経験を何度も味わった。しかし、今この場にも、こんなに沢山の人がいる。だから、私は日中関係について楽観的にとらえている。」と、また、「日本の方々と話をしたり、議論をしたりして、人と交流の場を広げていくとそこで言葉の勉強ができる。」と語ってくれました。市川さんからは、「『現場に行くこと』の大切さ、自分の目で、行ってみて、そこで見ることの大切さについて、中国への留学経験を通して考えた。」また、「日本人が中国語を覚えるのと中国人が日本語を覚えるのでは、中国人が日本語を覚える方が速い。」「日本の若者には、語学コンプレックスがある。」という話をしてくれました。宮川さんは、「中国留学中のエピソードで、文房具屋のおばさんが、『日本人なのによくしてくれるのよ。』と立ち話で言っていたことを通して、『日本人への印象が私を通して変わったのならうれしいな。』と思った。」という話をしてくれました。語学の壁については、「高校で文法等の基礎などやったのだが、留学した時習ったことがまったく頭に浮かばなかった。上海に4年いて口も耳も上達した。語学の上達はやはりそこに住むことだと思う。」と話してくれました。鈴木さんは、「世界共通のコンテンツは、共通の話題となる。」「言葉やイメージが壁になっている面があるので、そうしたところを払拭していくよう活動している。」「もっと大きな動きにして、相手の国を知ろうという、そんなきっかけづくりの種をまいりたい。」と、また、「日本人が中国語を学んでも、全然しゃべれるようにならない。それを乗り越える教育を考えていけたらと思う。」という発言がありました。

講評を前参議院議員・元内閣官房副長官 水岡俊一先



信じている。」「私の力は小さいけれど、自分なりの努力で、『日中友好の花』がもっと綺麗に咲けるように、頑張っていきたい。」



日中友好議員連盟近藤昭一先生の講演
大学へ留学)宮川咲(公益財団法人国際文化フォーラム職員・上海大学へ留学)鈴木由希(中華圏エンタメライター・台湾国立大学へ留学)という6名の方々でした。

生からいただきました。「去年今年と参加させていただいて、『これからの中日・日中関係をこういう若い人たちが背負って頑張ってくれるんだな。』という期待感を持った。」とまず話されました。その後、パネラー一人一人の講評をいただきました。まとめとして、「今日の6人のパネラーに共通しているのは、『中国のことを勉強して日本の方が分かった。日本の方を勉強して中国の方が分かった。』ということだと思う。自分の国を、自分を好きにならないと、人との交流やコミュニケーションは取れないし、大事なことは伝えられない。これからも明るい中日・日中関係の為に6人には頑張っていってほしい。私たちも頑張らなくてはならない。昨年も今年もとてもいい刺激をいただいた。一緒に頑張ろう。」とおっしゃっていました。

日本語作文コンクール最優秀賞受者 宋さんが協会顧問の輿石先生を表敬訪問



宋さんは、3月3日(土)に日本教育会館5階の「東アジア教育文化交流協会」事務所に輿石先生を訪ねました。先生から訪中時の貴重なお話や今後の日中の若者交流についてなどの話を聞きました。記念品の印伝の巾着を輿石先生からいただき感激していました。

第13回日本語作文コンクール 財団選考の「教育賞」2名が決定！

2017年度第13回日本語作文コンクール（日本僑報社主催、外務省・在中国日本大使館後援、朝日新聞社など協賛）には、中国全土の省市区の189校から4031編の応募がありました。協会は積極的にこの事業を後援し、毎年最終審査員に加わり、日本中国国際教育交流協会賞（教育賞）2編を選出しています。本年度の教育賞は、林雪



婷さんの「故きを温ねて新しきを知る」と、邱吉さんの「日本人に伝えたい中国文化のソフトパワー」でした。

～ホームステイ参加者も進学～ “フジ国際語学院卒業式”

3月7日(水)、フジ国際語学院の卒業式が行われ赤岡業務執行理事が出席しました。1000名を超える卒業生は、今年も国公私立大学に進学しました。フジ国際語学院は1989年の創建で、中国等からの留学生のニーズに合わせた、日本語教育、基礎科目教育等の指導に、取り組



んでいます。教育交流ホームステイに参加した学生たちもそれぞれ志望校に進学しました。ホームステイでの体験を、今後の学生生活の中で生かしてくれることと思います。

第32回理事会・第17回評議員会で来年度事業計画・予算が決まりました

3月14日(水)に、財団の第32回理事会と第17回評議員会が、日本教育会館7階704会議室で時間を前後して開かれました。理事・監事・顧問、役員・評議員の出席を得て、2018年度事業計画（山東省泰安市東平県への教育

支援・第17次教育訪中団及び第3回日中音楽教育交流会・ホームステイ事業・シンポジウム開催等）、18年度予算（総額9,307,000円）が慎重審議の後に、可決されました。

「中日平和友好条約締結40周年記念レセプション」に招待されました

4月1日(日)に、ホテルニューオオタニに於いて、中国宋慶齡基金会、日本宋慶齡基金会日中共同プロジェクト委員会の共催により「中日平和友好条約締結40周年記念レセプション」が開かれました。宋慶齡基金会の王家瑞主席をはじめとする19名の訪日団メンバー、許中国大使、日中友好に関わる各団体代表者、日中友好国会議員など100名ほどの関係者が集まり有意義な時間を過ごしました。



財団との取り組みについて、王主席が挨拶の中で取り上げてくれました。（黒田・赤岡が出席）

2018(平成30)年度の取り組み予定

- 8月 第7回教育交流ホームステイ
- 9月 第14回日本語作文コンクール
- 10月 第17次教育訪中団
- 11月 第3回日中音楽教育交流会
- 12月 第4回日中教育文化交流シンポジウム

※ホームステイ・教育訪中団及び音楽教育交流会・シンポジウムにつきましては、広く呼び掛けて行いますので、協会へご連絡の上、ふるってご参加ください。

公益財団法人日本中国国際教育交流協会

会報 NO.29

2018.11.1

共生力

HP : <http://ajciee.or.jp/>

Tel: 055-269-6533 Fax: 055-269-6534

〒400-0031 山梨県甲府市丸の内2-32-16

甲府丸の内マンション302

発行人：黒田文男

第17次教育訪中団派遣 第3回日中音楽教育交流会

開催（北京・泰安・青島）



中国宋慶齡基金会表敬訪問記念写真

9月27日(木)～30日(日)の4日間、北京・泰安・青島への、「第17次教育訪中団」の派遣を行いました。これは教育交流派遣事業としての取り組みで、「中国宋慶齡基金会青少年科技文化交流センターの見学及び基金会への表敬訪問と交流」「山東省泰安市東平県の音楽教師との音楽教育を中心とした教育交流＝『第3回日中音楽教育交流会』の開催」また、教育交流支援事業、「東平県の小学校への音楽教育支援の成果の確認」を、主な目的として行われました。訪中団の日程は、宋慶齡基金会基金部項目総合所長劉顥さんを窓口に、山東省泰安市東平県教育局の全面的な協力の下に計画されました。また、「第3回日中音楽教育交流会」については、第1・2回と同様に、日本中国国際教育交流協会・中国宋慶齡基金会・東平県教育局の三者の共催という形で行われました。訪中団の日程は、以下ようになりました。

第17次教育訪中団日程

27日(木) 北京市

○中国宋慶齡基金会表敬訪問及び「宋慶齡青少年科技文化交流センター」見学

28日(金) 泰安市(山東省)

○東平県の教育支援を行った学校での音楽授業の参観（夏謝小学校・東平州城道孫崗小学校）

○東原実研小学校で「第3回日中音楽教育交流会」の開催 ※参加者＝日本側（代表団14人）中国側（基金会2人、東平県人民政府2人、東平県教育局5人、教師代表12人）

29日(土) 青島市(山東省)

○青島市内見学・研修（青島市博物館・迎賓館・監獄旧址博物館・天主教堂他）

30日(日) 青島市

○市内見学（五四廣場他）

また、第17次教育訪中団のメンバーは、以下の方々になりました。

第17次教育代表団名簿

団長	黒田 文男	協会代表理事
副団長	金丸 徹	協会評議員
副団長	朽見 誠二	協会評議員
	小山 悟	協会評議員
政金 正裕		協会監査
田中 正志		協会公益事業審査委員
大石 茂生		静岡県教組教育研究所長
大久保 徹		千葉県教職員
副秘書長	小串 吾郎	山梨県教職員
	岡村 淳志	愛知県教職員
	小林美奈子	三重県教職員
	沢田 智文	静岡県教職員
	渡邊 勇一	茨城県教職員
秘書長	赤岡 直人	協会業務執行理事

北京に着いて、早速中国宋慶齡基金への表敬訪問を行いました。「宋慶齡青少年科技文化交流センター」では、新築応接室で杭元祥中国宋慶齡基金会常務副主席と唐九紅中国宋慶齡基金会基金部部長が待っていました。杭副主席と黒田代表理事の会見を中心、和やかに実り多い話し合いがもたらされました。

その中で、財団と基金会との共同プロジェクトについて、今後どのように発展させていくかの基本や方向が確認されました。次の5カ年計画につながる話し合いとなりました。その後、総工費200億円とも言われるセ



ンターの全体像や各階・各部屋での活動について説明を受けた後で、見学を行いました。

“素晴らしい”の一言に尽きる施設で、児童生徒ものびのびと活動していました。

東平県に於ける学校訪問・授業参観は、2015年度から3年間音楽教育支援を行ってきた14の小学校の中から、夏謝小学校・東平州城道孫崗小学校の2校を訪れました。どちらの小学校も、財団が支援した楽器を使い熱心に音楽の授業を行っていました。特に、夏謝小学校については、4年前に訪れたときとの授業の変化に驚かされました。

「第3回日中音楽教育交流会」は、東原実研小学校の会議室で行われました。東平県人民政府から程鵬副県長・王先海副主任、東平県教育局から何水局長他4名、そして12名の東平県の音楽教師の代表のみなさんの参加を得て、大いに意義のある話し合いがもたれました。



日本の大侵略の一つの足がかりでもあり、歴史に刻まれている「五四運動」の地でもある青島での見学・研修は、大いに意味のあるものでした。青島市博物館・迎賓館・監獄旧址博物館等での学習や市内の見学は、中国(特に青島)と日本との古代からの結びつきや近代に於ける負の関係、そして現代のより発展的な経済活動に於ける関係について、大いに学ぶことができました。成果を上げた4日間でした。



『第7回教育交流ホームステイ』 今年度は山梨県で実施



田中一郎記念奨学金を財源とする教育交流研究等助成事業の一つとして取り組んでいる「教育交流ホームステイ」が第7回となりました。今年は「夏の山梨ホームステイ3日間」ということで、山梨県の先生方の協力を得て、8月3日(金)から5日(日)の2泊3日で行いました。この事業は、「中国人留学生の日本語学習の一助として、日本家庭でのホームステイを体験し、ホストとの交流を通して日本語の語学力を磨き、日本人及び日本文化に対する理解を深め、日中両国の友好の礎を担う人材を育成すること」を実施目的として取り組んできています。山梨県内各地域の7家庭のホストファミリーに、中国からの留学生(日本語研修生)7名が、ホームステイしました。

ホームステイ日程

8月3日(金) 新宿駅に集合→山梨へ、甲府駅北口ホールでホストファミリーと合流→それぞれ活動にうつる

8月4日(土) ホストファミリーごとの取り組み(各ホストの計画と学生の要望による体験等)

8月5日(日) 午後山梨県教育会館へ集合→ホストファミリーとのお別れ会・総括会→甲府駅改札口で解散

全体交流会での感想発表、ホストファミリーアンケートや留学生のレポートから、7人の留学生・ホストの7家庭とも「とても貴重で忘れられない有意義な時間を過ごせた」との好評を得ました。

ホストファミリーアンケートから

「2泊3日という限られた期間でしたが、留学生と過ごす中で、日本と中国の文化や習慣の違いに気づかされたり、理解を深められたりすることができ、とても貴重な経験となりました。」「一緒に過ごしている間、よくおしゃべりをしました。私たち自身が中国の文化や習慣について初めて知ることばかりで、私たちの方がいい経験をさせていただきました。」

留学生のレポートから

「今度の活動で日本語を話す能力が上がりました。日本の生活を体験しました。ホストファミリーの皆さんにとってありがたい気持ちを持っています。家の温もりを感じました。」「今回のホームステイは、日本の美しい風景、面白い文化、おいしい食べ物を教えてくれました。さらに、日本の人々の可愛らしさと優しさを感じさせられました。この旅行は私の人生の中で貴重で忘れられない思い出になりました。」

お知らせ

教育交流・研究助成事業

「第4回 日中教育文化交流シンポジウム」

日時 2019(平成31)年2月

場所 日本教育会館

内容 日中両国青年による意見交換

機関関係

(1) 2017(平成29)年度事業報告

1. 教育交流・派遣事業

① 5カ年計画となる「宋慶齡基金会との新たなプロジェクト=山東省泰安市東平県との教育交流事業」の3年目としての取り組みを進めました。具体的には、2018年度に行う「第17次教育訪中団」の実施に向けて、中国宋慶齡基金会・山東省泰安市東平県教育局と話し合いを行いました。「音楽教育の交流・音楽教育の支援を踏まえたプロジェクトの成果が確認できる」そういった訪中団とするために、計画の具体化を進めています。訪中団の受入については、宋慶齡基金会より承諾を得ています。

2. 教育交流・受入事業

① 10月29日(日)～11月1日(水)の4日間、静岡県磐田市を中心に、「第4次宋慶齡基金会教育交流代表团」の受入を行いました。「宋慶齡基金会及び基金会が推薦した東平県の音楽教師と音楽教育を中心とした教育交流・研修を行う。」「第2回日中音楽教育交流会を開催する。」を、具体的な目的として行いました。訪日代表团は、宋慶齡基金会基金部項目総合所長の劉さんを窓口に、山東省泰安市東平県教育局の全面的な協力の下に編成されました。また、「第2回日中音楽教育交流会」については、第1回と同様に、日本中国国際教育交流協会・中国宋慶齡基金会・東平県教育局の三者の共催という形で行いました。団の編成は、宋慶齡基金会より2名、山東省泰安市東平県教育局より1名、東平県の小学校校長1名、教諭3名の計7名でした。代表团の受入については、協会の理事でもある静岡県教組の鈴木委員長の全面的な協力を得て行いました。音楽交流会は、昨年度「第1回交流会(東平県で開催)」に参加していただいた神谷校長先生・安藤主幹教諭の勤務する磐田市立富士見小学校を会場に行いました。また、ヤマハピアノ工場の見学、静岡県知事と磐田市長・教育長への表敬訪問も行いました。日本の学校教育への理解という意味でも、また、音楽の授業実践を通しての学び合いという意味でも、大いに成果があったと感じられました。

3. 教育交流・支援事業

① 「宋慶齡基金会との新たなプロジェクト=山東省泰安市東平県との教育交流事業」の3年目として、引き続き山東省泰安市東平県への教育支援を行いました。一つには、「第2回日中音楽教育交流会」という形での音楽教育の研修会を、宋慶齡基金会を通して東平県の教育局と打ち合わせる中で日本で実現させました。二つ目としては、東平県教育局の要望を、宋慶齡基金会を通して具体的に把握する中で、東平県下の小学校への楽器等の寄贈を決定しました。今年度教育支援費100万円については、「第2回日中音楽教育交流会」の実施のための諸経費(訪日費用の一部)と楽器の購入費に充てることが確認され、8月上旬の協定締結後、宋慶齡基金会を窓口として東平県へ送金しました。

4. 教育交流・研究等助成事業

① 中国人等外国人日本留学生は、年々増加しています。日本を理解し、日本と母国との友好を担える人材育成の必要性が増大しています。中国からの留学生のほとんどは、日本語学校に通学していますが、特に入学初年度は、語学力も十分でなく、学業のみならず生活面でも困難に直面している学生も多いと言われています。こうした留学生の語学力の向上をめざし、また日本をより良く理解する人材を育成するために、教育交流・研究等助成事業として第6回となるホームステイ事業を8月4日(金)から6日(日)の2泊3日の日程で、千葉県で実施しました。最終日のまとめの会での発言の中にも、終了後提出してもらった報告書や感想文を読んで、このホームステイの取り組みが、留学生・ホストファミリーのどちらにとどても交流・理解・信頼の進展に大いに役立ったことが確認できました。

② 教育現場や個人・団体の国際教育交流活動を活発化させ相互理解を深めるための取り組みとして、「第3回日中教育文化交流シンポジウム」を、3月3日(土)に日本教育会館9階会議室で開催しました。今年度も日本語作文コンクールへの取り組みとも関連させる中で、日本と中国の若者の意識に焦点を当てて、両国

の歴史性を踏まえた関係認識を考えていくそんなシンポジウムとして実施しました。日中の若者・教職員・協会関係者・マスコミ関係者等で、約90名ほどの参加がありました。パネラーには、今年度の日本語作文コンクール最優秀賞の宋奸さんと、過去の入賞者で日本に留学・就職している2名と、中国への留学経験のある日本人学生3名を選びました。また基調講演は、衆議院議員で中国への留学経験もあり、日中友好議員連盟幹事長でもある近藤昭一先生に「日中関係と若者の役割」という演題で行っていただきました。日中を中心とする教育文化交流活動を活発化させるため、大きな意味ある取り組みとして成果を上げることが出来たと思います。

③ 2017年度第13回日本語作文コンクール（日本橋報社主催、外務省・在中国日本大使館後援、朝日新聞社など協賛）には、中国全土の省市区の189校から4031編の応募がありました。募集する作文のテーマは、昨年に引き続き3つでした。今年は日本と中国の国交正常化45周年の節目の年に当たることから、これを記念して、日中関係のさらなる深化・発展の一助になり得るような意見や提言のある作文を募集したとのことでした。テーマは、（1）日本人に伝えたい中国の新しい魅力（2）中国の『日本語の日』に私ができること（3）忘れられない日本語教師の教えでした。

日中関係は、今日その結びつきや影響力が益々進化・発展して来ていると思います。そのことを踏まえ、中国の若者ならではの主張や、新鮮な本音がうかがえるような意義のあるテーマが選ばれていると思いました。協会は積極的にこの事業を後援し、毎年最終審査員に加わり、日本中国国際教育交流協会賞（教育賞）2編を選出しています。本年度の教育賞は、林 雪婷さんの「故きを温ねて新しきを知る」と、邱 吉さんの「日本人に伝えたい中国文化のソフトパワー」でした。

5. その他の活動

- ① 今年度は理事会を3回、評議員会を2回、監査を1回開催しました。
- ② 広報関係では、2018年3月に『会報24号』を発行し、「共生力」は、26（4月）・27（11月）号を発行しました。
- ③ 財政確立に向けての賛助会員の取り組みは、11万円ほど集まっています。
- ④ 懸案となっていたリースの解約については、会計事務所と相談する中で、事務所移転費用としても計上してあった「雑費」から支出して行いました。

（2）2017（平成29）年度 事業・会議

（2017年4月1日～2018年3月31日）

2017年（平成29年）

- | | |
|----------|---------------------------------|
| 4月 5日（水） | 決算について会計事務所と打ち合わせ |
| 10日（月） | 事務局打ち合わせ（決算等） |
| 17日（月） | 第4次宋慶齡基金会教育代表団受け入れ打ち合わせ（JTB・静岡） |
| 21日（金） | 平成28年度第1回監査会・第30回理事会通知発送 |
| 24日（月） | 「共生力NO26」発行 |
| 26日（水） | 事務局打ち合わせ |
| 5月11日（水） | 事務局打ち合わせ |
| 15日（月） | 事務局打ち合わせ |
| 17日（水） | 平成29年度第1回監査会 |
| 24日（水） | 第30回理事会 |
| 25日（木） | 第16回評議員会通知発送 |
| 6月 5日（月） | 事務局打ち合わせ |
| | 教育21関係の打ち合わせ |
| 14日（月） | 第16回評議員会 |
| 28日（水） | 内閣府電子申請について会計事務所との打ち合わせ |

30日（金）	内閣府電子申請提出
7月 5日（水）	輿石顧問と打ち合わせ
14日（金）	第4次宋慶齡基金会教育代表団受け入れ
19日（水）	第6回ホームステイ保険関係打ち合わせ（JTB）
24日（月）	第5回ホームステイホストファミリー・参加学生決定
8月 2日（水）	事務局打ち合わせ
	第6回ホームステイ参加学生打ち合わせ（東京）
	第6回ホームステイホストファミリー打ち合わせ（千葉）
4日（金）	事務局打ち合わせ
～6日（日）	第4次宋慶齡基金会教育代表団受け入れ
28日（月）	第6回ホームステイ保険関係打ち合わせ（JTB）
29日（火）	第6回ホームステイin千葉
31日（木）	事務局打ち合わせ
9月13日（水）	第4次宋慶齡基金会教育代表団受け入れ打ち合わせ（JTB・静岡）
	第13回日本語作文コンクール第二次審査終了
21日（木）	事務局打ち合わせ
10月 5日（木）	第4次宋慶齡基金会教育代表団受け入れ打ち合わせ（JTB・静岡）
	事務局引き継ぎ等打ち合わせ
10日（火）	宋慶齡基金会との協定書の締結
11日（水）	事務局打ち合わせ
13日（金）	協会資産について労金との打ち合わせ
20日（金）	宋慶齡基金会へ教育交流支援事業費100万円を送金
25日（水）	第4次宋慶齡基金会教育交流代表団受け入れ打ち合わせ・準備
29日（日）	第4次宋慶齡基金会教育交流代表団来日（東京・静岡）
～	第2回日中音楽教育交流会（磐田市） 静岡県知事・磐田市長表敬
11月 1日（水）	訪問、ヤマハピアノ工場見学他
10日（金）	第13回日本語作文コンクール教育賞受賞者決定（林雪婷 東北大学秦皇島分校「故きを温ねて新しきを知る」・邱 吉 浙江工商大学 「私が日本人に伝えたい中国文化のソフトパワーは漢方医学だ」）
	事務局打ち合わせ
13日（月）	黒田代表と打ち合わせ
29日（水）	「共生力NO27号」発行
30日（水）	賛助会員への呼び掛け文書の発送
12月 1日（金）	事務局打ち合わせ
	第17次教育訪中団実施について打ち合わせ（JTB）
13日（水）	事務所のリース関係等について業者との打ち合わせ
20日（水）	事務所のリース関係等について業者との打ち合わせ及び作業
2018年（平成30年）	
1月17日（水）	事務局打ち合わせ
22日（月）	第3回教育交流シンポジウム打ち合わせ（東京）
30日（火）	第31回理事会（書面議決）、第3回教育交流シンポジウム開催案内発送
2月 9日（金）	第31回理事会議決日
	第32回理事会・第17回評議員会開催通知、第3回教育交流シンポジウム開催案内発送
21日（水）	フジ国際語学院へシンポジウム等の打ち合わせに
22日（木）	近藤昭一衆議院議員の事務所へ打ち合わせに

27日（火） 会計事務所との打ち合わせ
 3月3日（土） 第13回日本語作文コンクールで最優秀賞（日本大使賞）を受賞した宋 妍（そうけん、河北工業大学）さんが、奥石顧問を表敬訪問
 第3回日中教育交流シンポジウム開催

7日（木） フジ国際語学院卒業式
 14日（水） 第32回理事会
 第17回評議員会
 15日（木） 2017年度（平成29年度）会報24号発刊

（3）2018（平成30）年度事業計画案

協会は今年度も、教育交流派遣事業・支援事業・受入事業の展開へと結ぶことのできる山東省泰安市における「教育交流プロジェクト」の推進等を中心に、草の根教育交流をより深く、多様に発展させることができました。特に今年度は、第4次宋慶齡基金会教育交流代表団の受入とそれに合わせて静岡県磐田市で行った「第2回音楽教育交流会」で、大きな成果をあげました。また、教育交流研究等助成事業として第6回となる中国人留学生と日本の教職員家庭との友好を深める「教育交流ホームステイ」事業は、参加した学生の語学等の研修ということばかりでなく、受入れたホストファミリーを基盤に、地域での日中友好、相互理解の輪を広げています。さらには、第3回教育交流シンポジウムの開催は、日本語作文コンクール後援との関わりを大切にしながら、日中の青年による意見交流を通しながら教育について考えるという新たな取り組みとなり、これまた大きな成果を上げてきています。

協会の持続可能な活動を発展させるため、2018（平成30）年度は下記の教育交流事業を推進します。

1. 教育交流・派遣事業

- ① 教育交流プロジェクトとして、山東省泰安市東平県における音楽教育での交流事業の取り組みを踏まえ、第17次訪中団を実施します。

2. 教育交流・受入事業

- ① 新たな教育交流プロジェクトを模索する中で、第5次宋慶齡基金会教育交流代表団の受入についての準備を開始します。
- ② 中国教育国際交流協会、中国宋慶齡基金会、教育工会及びその他の教育諸団体が派遣する団体との教育交流、及び学校参観などの受入れ手配等を行います。

3. 教育交流・支援事業

- ① 4年次となる東平県への教育交流支援をおこないます。

4. 教育交流・研究等助成事業

- ① 第7回教育交流ホームステイを実施します。
- ② 教育現場や個人・団体の国際教育交流活動を活発化させるため、第4回日中教育文化交流シンポジウムを開催します。
- ③ 日本語作文コンクール（日本橋報社・日中交流研究所主催）の後援を継続します。

5. 機関運営などに関して

- ① 理事会、評議員会を年2回、監査委員会を年1回、各委員会、事務局会を随時行います。
- ② 年会報25号を発行します。また、『共生力』を随時発行します。ホームページの充実を図ります。
- ③ 事業推進に関する理解を図りながら会員を拡大し、よって財政基盤の確立を図るために、引き続き組織的な取り組みを進めます。

（4）2018（平成30）年度収支予算

平成30年4月1日から平成31年3月31日まで

（単位：円）

科 目	30年度予算案額	29年度予算案額	29年実績(1/未現在)	増減 A-B	備 考
1 事業活動収支の部					
1. 事業活動収入					
① 基本財産運用収入	3,000	7,500	3,000	△ 4,500	
基本財産運用収入	3,000	7,500	3,000	△ 4,500	
② 特定資産運用収入	2,290	2,290	2,441	0	
(公1)訪中派遣費用準備資金	160	160	163	0	積立金残高220万円
(公2)訪日受入事業準備資金	0	150		△ 150	積立金残高200万円
(公3)教育交流支援費用準備資金	230	230	372	0	積立金残高300万円
(公4)田中一郎記念奨学基金	700	700	706	0	積立金残高156万円+792万円
(共通)教育交流積立金	1,200	1,050	1,200	150	積立金残高1410万円
③ 会費収入	7,000,000	7,100,000	7,118,000	△ 100,000	
1. 団体会費収入	6,800,000	6,900,000	6,900,000	△ 100,000	
2. 個人会費収入	100,000	100,000	145,000	0	
3. 貢助会費収入	100,000	100,000	73,000	0	
④ 寄付金収入	0	0	0	0	
寄付金収入	0	0	0	0	
特別寄付金収入	0	0	0	0	
⑤ 事業収入	1,180,000	140,000	140,000	1,040,000	
1. 教育交流・派遣事業	1,040,000	0	0	1,040,000	80,000×13
2. 教育交流・受入事業	0	0	0	0	
3. 教育交流・支援事業	0	0	0	0	
4. 教育交流・研究助成事業	140,000	140,000	140,000	0	20,000×7(ホームステイ)
⑥ 雜収入	0	0	22	0	
雑収入	0	0	0	0	
受取利息	0	0	22	0	
事業活動収入合計	8,185,290	7,249,790	7,263,463	935,500	
2. 事業活動支出			0		
① 事業費支出	7,046,000	7,660,000	5,877,853	△ 614,000	
(1) 教育交流・派遣事業	2,928,000	1,278,000	902,438	1,650,000	
1. 役員報酬	240,000	240,000	240,000	0	
2. 給料手当	330,000	330,000	320,000	0	総額の12分の3
3. 会議費	1,000	1,000	0	0	会議会場費飲食代など
4. 交際費	30,000	1,000	0	29,000	事務所来客用お茶等、土産代
5. 旅費交通費	2,000,000	350,000	1,200	1,650,000	訪中旅費、役員交通費他
6. 通信運搬費	48,000	30,000	22,514	18,000	電話料金(3か月)
7. 消耗品費	1,000	1,000	0	0	
8. 印刷製本費	25,000	25,000	22,555	0	ゼロックスカウント料(3か月)
9. 貸借料	183,000	300,000	296,169	△ 117,000	総額の約12分の3
10. 委託費	0	0	0	0	
11. 教育支援費	0	0	0	0	
12. 研究助成費	0	0	0	0	
13. 謝金	50,000	0	50,000	0	現地通訳謝金
14. 雜費	20,000	0	20,000	0	
(2) 教育交流・受入事業	579,000	2,827,000	2,000,430	△ 2,248,000	
1. 役員報酬	160,000	160,000	80,000	0	
2. 給料手当	220,000	220,000	100,000	0	総額の12分の2
3. 会議費	1,000	1,000	0	0	交流会議 打合せ 会場費など
4. 交際費	1,000	50,000	0	△ 49,000	
5. 旅費交通費	15,000	1,700,000	1,294,623	△ 1,685,000	役員交通費 会議参加費ほか
6. 通信運搬費	32,000	40,000	17,932	△ 8,000	電話料金(2か月) 公2事業資料送付等
7. 消耗品費	1,000	1,000	0	0	
8. 印刷製本費	25,000	20,000	14,449	5,000	ゼロックスカウント料(3か月)
9. 貸借料	122,000	200,000	63,116	△ 78,000	総額の約12分の2
10. 委託費	1,000	0	1,000	0	
11. 教育支援費	0	350,000	318,940	△ 350,000	交流会議 打合せ 会場費など
12. 研究助成費	0	15,000	0	△ 15,000	訪日に関わる諸費用等
13. 謝金	0	70,000	111,370	△ 70,000	
14. 雜費	1,000	0	1,000	0	
(3) 教育交流・支援事業	1,573,000	1,638,000	1,607,839	△ 65,000	
1. 役員報酬	160,000	160,000	160,000	0	
2. 給料手当	220,000	220,000	220,000	0	総額の12分の2
3. 会議費	1,000	1,000	0	0	打合せ 委員会 参加者会議 会場費など
4. 交際費	1,000	1,000	0	0	事務所来客用お茶等
5. 旅費交通費	15,000	15,000	5,800	0	役員交通費 会議参加費ほか
6. 通信運搬費	32,000	20,000	14,510	12,000	電話料金(2か月)
7. 消耗品費	1,000	1,000	0	0	
8. 印刷製本費	10,000	10,000	5,999	0	ゼロックスカウント料(3か月)
9. 貸借料	122,000	200,000	194,530	△ 78,000	総額の約12分の2
10. 委託費	1,000	0	1,000	0	
11. 教育支援費	1,000,000	1,000,000	1,000,000	0	宋慶齡基金会との共同プロジェクト
12. 研究助成費	0	0	0	0	
13. 謝金	0	0	0	0	
14. 雜費	10,000	10,000	7,000	0	送金手数料など
(4) 教育交流・研究等助成事業	1,366,000	1,317,000	1,071,286	49,000	
1. 役員報酬	160,000	160,000	160,000	0	
2. 給料手当	220,000	220,000	220,000	0	総額の12分の2
3. 会議費	100,000	70,000	74,649	30,000	研究会 打合せ 会場費など
4. 交際費	5,000	1,000	4,000	4,000	事務所来客用お茶、手土産等

科 目	30年度予算案額	29年度予算案額	29年実績(1/未現在)	増減 A-B	備 考
5. 旅費交通費	95,000	95,000		0	役員交通費 ホームステイ、シンポジウム旅費等
6. 通信運搬費	32,000	20,000		12,000	電話料金(2か月)
7. 消耗品費	1,000	1,000		0	
8. 印刷製本費	10,000	10,000	4,005	0	ゼロックスカウント料(3か月)
9. 貸借料	122,000	200,000	201,171	△ 78,000	総額の約12分の2
10. 委託費	0	0		0	
11. 教育支援費	0	0		0	
12. 研究助成費	550,000	520,000	411,461	30,000	作文コンクール・ホームステイ・シンポジウム(懇親会含む)など
13. 謝金	70,000	20,000		50,000	シンポジウムバナー、講師謝金
14. 雑費	1,000	0		1,000	
共通	600,000	600,000	295,860	0	
1. 役員報酬	0	0	0	0	
2. 給料手当	0	0	0	0	
3. 会議費	10,000	10,000	5,443	0	研究会 打合せ 会場費など
4. 交際費	10,000	10,000		0	事務所来客用お茶等
5. 旅費交通費	100,000	100,000	163,631	0	役員国内交通費委託先訪問時ほか
6. 通信運搬費	180,000	180,000	95,431	0	切手代 賛助会費発送代 封筒代 資料送付等
7. 消耗品費	20,000	20,000	5,075	0	
8. 印刷製本費	250,000	250,000		0	年会報印刷代
9. 貸借料	0	0		0	総額の約12分の2
10. 委託費	30,000	30,000	26,280	0	H.P.使用料ドメイン使用料
11. 教育支援費	0	0		0	
12. 研修助成費	0	0		0	
13. 謝金	0	0		0	
14. 雑費	0	0		0	
② 法人費支出	2,261,000	2,701,000	1,449,632	△ 440,000	
1. 役員手当報酬支出	240,000	240,000	80,000	0	
2. 給料手当支出	330,000	330,000	110,000	0	総額の12分の3
3. 法定福利費支出	5,000	5,000	3,986	0	
4. 会議費支出	70,000	70,000	58,401	0	理事会 評議員会等会場費 打ち合わせなど
5. 交際費支出	50,000	50,000	15,382	0	慶弔費など
6. 旅費交通費支出	400,000	400,000	221,900	0	理事会 評議員会旅費など
7. 通信運搬費支出	30,000	30,000	21,949	0	電話料金(3か月)
8. 消耗什器備品費支出	10,000	10,000	0	0	パソコン資金など
9. 消耗品費支出	10,000	10,000	18,300	0	修繕費を含む
10. 印刷製本費支出	1,000	1,000		0	
11. 貸借料支出	260,000	250,000	197,446	10,000	総額の約12分の3更新料、火災保険料、保証料他
12. 租税公課支出	5,000	5,000	1,300	0	
13. 委託料支出	800,000	800,000	702,000	0	日本パートナーズ会計など
14. 雑支出	50,000	500,000	18,968	△ 450,000	
事業活動支出合計	9,307,000	10,361,000	7,327,485	△ 1,054,000	
事業活動収支差額	△ 1,121,710	△ 3,111,210	△ 64,022	1,989,500	
II 投資活動収支の部				0	
1. 投資活動収入				0	
① 基本財産変更差額収入	0	0	0	0	
基本財産変更差額収入		0		0	
② 特定資産取崩収入	3,320,000	3,520,000	3,520,000	△ 200,000	
(公1)訪中派遣費用準備資金	1,800,000	0		1,800,000	
(公2)訪日受入事業準備資金		2,000,000	2,000,000	△ 2,000,000	
(公3)教育交流支援費用準備資金	1,000,000	1,000,000	1,000,000	0	
(公4)田中一郎記念奨学基金	520,000	520,000	520,000	0	
(共通)教育交流積立金		0		0	
投資活動収入計	3,320,000	3,520,000	3,520,000	△ 200,000	
2. 投資活動支出				0	
① 特定資産取得支出	1,000,000	500,000	0	500,000	
(公1)訪中派遣費用準備資金		0		0	
(公2)訪日受入事業準備資金		0		0	
(公3)教育交流支援費用準備資金		0		0	
(公4)田中一郎記念奨学基金		0		0	
(共通)教育交流積立金	1,000,000	500,000		500,000	余剰資金=予備費分を積立
② 固定資産取得支出	0	0	0	0	
什器備品購入支出	0	0		0	
③ その他の支出	0	0	1,078,458	0	
解約金	0	0	1,078,458	0	
投資活動支出計	1,000,000	500,000	1,078,458	500,000	
投資活動収支差額	2,320,000	3,020,000	2,441,542	△ 700,000	
III 財務活動収支の部				0	
1. 財務活動収入				0	
財務活動収入計				0	
2. 財務活動支出				0	
財務活動支出計				0	
財務活動収支差額		0		0	
IV 予備費支出	1,000,000	500,000	500,000		
当期収支差額	198,290	△ 591,210	2,377,520	789,500	
前期繰越収支差額	1,505,760	2,096,970	2,491,300	△ 591,210	
次期繰越収支差額	1,704,050	1,505,760	4,868,820	198,290	
V 当期一般正味財産増減額の部				0	
一般正味財産期首残高(見込概数)	63,461,071	64,603,551	64,603,551		
一般正味財産期末残高(見込概数)	65,165,121	61,492,341	63,461,071		
VI 当期指定正味財産増減額の部				0	
指定正味財産期首残高		0		0	
指定正味財産期末残高		0		0	
VII 正味財産期末残高(見込概数)	65,165,121	61,492,341	63,461,071		

(5) 2018(平成30)年度役員・評議員・公益事業審査員名簿

公益財団法人日本中国国際教育交流協会 理事・評議員・監査・顧問

< 2019(平成31)年2月1日現在 >

評議員(7名)

井上 定彦

赤岡直人(業務執行理事)

金丸 徹

秋山俊一

小山 悟

朽見誠二

鈴木 寛

黒田文男(代表理事)

高野 雅典

鈴木伸昭

別所 勝也

中村武志

山中小白

前嶋徳男

監事(2名)

祝迫規之

輿石東

政金正裕

生井榮一

公益事業審査委員(3名)

初岡昌一郎

樋口弘夫

田中正志

金丸徹(評議員)

赤岡直人(理事)

協会の歩み

設立 1991年1月

1992年財団法人認可

2010年8月5日公益財団法人認定

公益財団法人移行 2010年8月9日

創立者 田中一郎（初代理事長）

理事長 生井榮一（第2代）

代表理事 黒田文男（第3代2010年4月～現在）

教育交流・派遣事業

1992 私立学校教職員訪中団（北京、大連）、第1次教育訪中団（北京、杭州）。李鉄映国家教育委員会主任と会見

1993 第2次教育訪中団（北京、瀋陽、撫順、大連。倪全人代常務副委員長会見）

1994 第3次訪中団（昆明、成都）

1995 第4次教育訪中団（ウルムチ、トルファン）、協会理事訪中団（北京。国家教育委員会、中国教育国際交流協会訪問）

1996 第5次教育訪中団（濟南、青島、蘇州）

1997 第6次教育訪中団（日中国交正常化25周年、財団設立5周年記念北京、天津、常州、蘇州。朱国家教育委員会主任と会見）

1998 第7次教育訪中団（北京、ハルビン、長春）

1999 第8次教育訪中団（南京、杭州、上海）

2000 第9次教育訪中団（昆明、大理、麗江）

2001 第10次教育訪中団（西寧、西安）

2002 第11次教育訪中団（日中国交正常化25周年記念。南寧、桂林）

2004 第12次教育訪中団（北京、承德）

2006 第13次教育訪中団（北京、天津）

2007 第1期安東自由大学参加団（韓国・安東市）

2008 第14次教育訪中団（北京、河北省易県）

第2期安東自由大学参加団（韓国・安東、ソウル）

2009 第3期安東自由大学参加団（韓国・安東、ソウル）

2010 第15次教育訪中団（北京、河北省易県）

2011 第5期安東自由大学参加団（韓国・安東、ソウル）

2012 第6期安東自由大学参加団（韓国・安東、大邱、ソウル）

2013 第7期安東自由大学参加団（韓国・安東、ソウル）

2014 第16次教育訪中団（上海・南京）

2015 視察研修訪中団（北京・泰安市東平県）

2016 第1回日中音楽教育交流会（北京・泰安市東平県）

2018 第17次教育訪中団（北京・泰安・青島）

教育交流・受入事業

1992 中国教職員訪日代表団（東京、三重、神奈川、愛知、茨城、山梨、千葉、静岡）

1993 寧波市訪日団（東京、茨城、群馬、千葉）、常州市訪日団（兵庫、福井、三重）、寧夏自治区訪日団（愛知、富山、新潟）、中国教育国際交流代表団（東京、神奈川、静岡、神奈川、京都、奈良、兵庫、大阪。赤松文相と会談）

秘書長）、中国教育科学文化衛生体育工会（万民東主席）を訪問。第4回音楽教師養成セミナー支援（250万円）。

2013 第5回音楽教師養成セミナー支援（200万円）（黒田代表理事、会員代表ら8名参加）。

2014 協会代表（黒田理事長）以下3名が中国宋慶齡基金会（井頓泉副主席）、中国教科文衛體工會全國委員會（白立文國際代表）を訪問。第5回音楽教師養成セミナー支援（100万円）送金。

2015 協会代表（黒田理事長）以下3名が中国宋慶齡基金会（井頓泉副主席）を訪問。山東省泰安市東平県音楽教育支援（100万円）。

2016 協会代表（黒田理事長）以下6名が中国宋慶齡基金会（井頓泉副主席）を訪問。山東省泰安市東平県音楽教育支援（100万円）。

2017 山東省泰安市東平県音楽教育支援（100万円）。

2018 山東省泰安市東平県音楽教育支援（100万円）。

教育交流・支援事業

1996 雲南省災害教育復興資金（100万円）を贈る。

1998 長江水害見舞金（100万円）を中国教育国際交流協会を通じて贈る。松花江水害見舞金（50万円）を黒龍江省教育委員会を通じて贈る。

2006 協会代表、中国宋慶齡基金会、河北省易県を訪問。

2007 生井理事長が中国宋慶齡基金会胡啓立主席と会談。河北省易県小学校へ机椅子600セット及び電子キーボード40台（総額200万円）の教育支援及び音楽教師養成セミナー支援。協定書締結。

2008 四川大地震に対し、見舞金（100万円）を中国教育国際交流協会を通じ四川教育国際交流協会へ。同じく見舞金（50万円）を宋慶齡基金会を通じ贈る。また、舞金（50万円）をミャンマーサイクロン被害見舞金（50万円）をビルマミャンマーサイクロン被害見舞金（50万円）をビルマ日本事務所を通じて送る。日本教育公務員共済会より易県教育支援に関し、本部奨励金（100万円）を受ける。

2009 第1回音楽教師養成セミナー参加（北京、河北省易県）

2010 第2回音楽教師養成セミナー支援・参加（70万円）

2011 第3回音楽教師養成セミナー支援・参加（100万円）。

2012 東日本大震災支援「こども音楽再生基金」へ寄附（100万円）。

2012 協会代表（黒田代表理事）以下4名が中国宋慶齡基金会（李寧秘書長）、中国教育国際交流協会（林佐平副会長）

国人の日本語作文コンクール」を後援。第3回教育交流シンポジウム開催。

2018 第7回教育交流ホームステイ（in 山梨）。第14回「中国人の日本語作文コンクール」を後援。第4回教育交流シンポジウム開催。

（2019年3月現在）

公益財団法人日本中国国際教育交流協会とは

◆日本中国国際教育交流協会は

1971年に創立。東アジアの豊かな未来を実現するために、日本と中国を柱として、教育交流事業を進めています。子どもや教育の持つ「共生力」に限りない期待を寄せています。

◆公益財団法人とは

広く公益に資する事業を進めている法人として2010年内閣府から認定を受けました。公益法人は、寄付金に税はかかるないので、支援がしやすいのが特徴です。

◆教育交流は4つの分野で

1 派遣

教育に関心のある人たちによって構成された協会が派遣する団で、学校見学、授業の交流、子どもや教職員との交流を行い、未来の東アジアを地球規模で考えます。

2 受入

諸外国からの教育関係の訪日団を受け入れ、学校訪問等を行い、教職員や子どもたちとの交流を深めています。訪日団の希望に沿って、教育現場の協力を得た研修への参加ができます。

3 支援

教育困難地域の学校に、机や椅子などの学校備品のほか、電子キーボードなどの教育機器を送っています。また送った機器を使って授業が進められるための研修を支援しています。支援を受け入れる団体は、行政または信頼のおける団体です。

4 研究等助成

田中一郎奨学基金を設立し、東アジアを中心に国際的な教育交流を担う人材を育成します。また、「日本語作文コンクール」「教育交流ホームステイ」などを通して、海外や日本で日本語を勉強している若者の学習を助成しています。

◆東アジアでのこの素敵な教育交流への参加をお待ちします。

個人会員 年会費 一口 5,000円

団体会員 年会費 一口 10,000円

賛助会員 年会費 一口 3,000円

寄付金 随時

会員、寄附をされた団体・個人には、協会の年会報、「共生力」（随時発行の会報）、海外派遣への先行連絡、イベントのご案内など差し上げます。

【編集後記】

今年度も、「日中を中心とした教育交流の取り組みを通して、人と人のつながりを大切にした、温かな血の通う民間交流を進めていこう。」の志の元に、活動して参りました。

山東省泰安市東平県における、中国宋慶齡基金との「共同プロジェクト（音楽教育交流による派遣・受入・支援事業）」も4年目が終わりました。第17次教育訪中団（中国宋慶齡基金訪問・中国宋慶齡青少年科技文化交流センター視察・東平県小学校音楽教育視察・第3回日中音楽教育交流会実施・青島市視察研修）の派遣、東平県の小学校への音楽教育支援（楽器等の寄贈）と、大きな成果を上げつつあります。研究等助成事業として行っている「第7回教育交流ホームステイ」「第4回日中教育文化交流シンポジウム」「第14回日本語作文コンクール」の取り組みも、安定した実績を積み上げつつあると思います。

第25号の会報として、この一年間の歩みをまとめました。是非ともご覧いただき、多くの建設的なご意見と、活動・取り組みへのご協力を、今後とも当協会にいただけますよう、よろしくお願い致します。

■公益財団法人日本中国国際教育交流協会【会報第25号】

2019年（平成31年）3月15日発行

発行人…黒田文男 表紙題字…田中一郎（創立者） 印刷…（株）アートプリント

〒400-0031 山梨県甲府市丸の内2-32-16 甲府丸の内マンション302

Tel.055-269-6533 Fax.055-269-6534

HP : <http://ajciee.or.jp/>